

ようになった。

(a) 比喩の「やうだ」

「やうだ」が全部で95例ある内比喩の「やうだ」は24例使用されている。

例(3)(4)を参照

例(3)

「『誰かしら』と思ひながら、彼女が客間に近づいて行つてみると、その中から、こわれたギターのやうな声が聞えて来た。」

例(4)

「一つの少女の顔。ラファエロの描いた天使のやうに聖らかな顔。」

また次のようなおもしろい例もありました。例(5)参照

例(5)

「そしてそれは(細木夫人の部屋) 彼に何となく一等船室のサロンを思はせた。

ときどき彼が船暈を感じてゐる人のやうな眼ざしを夫人の上に投げるのに注意するが

い。だが扁理の心理をそんなに不安にさせるのは、さういう環境のためばかりでなしに、

細木夫人とともに故人の思ひ出を語りながら、たえず相手の氣持について行かうとして、出来るだけ自分の年齢の上に背伸びをし

てゐるためであつたのだ。」

つまり「船暈を感じてゐる人のやうな眼ざし」という比喩は前のセンチタンスの「一等船室のサロン」の縁語として使用されているとともに、後のセンチタンスの「扁理の心理」の象徴として表現されている。

このやうに比喩の「やうだ」が文関連の中で心理や意識の象徴のことばとつながっている例は7例見つけることができた。

(b) 不確実な断定の「やうだ」

不確実な断定の「やうだ」は66例使用されている。この不確実な断定の「やうだ」の使用的特徴的な点は次のように使用されていることである。

連用形の場合は「：やうに思はれた」、連体形の場合は「：……のやうな気がした。」という使い方がかなり多く見られる。つまり意識内動作に関連している所が特徴的な点である。例(6)(7)を参照

例(6)

「そして、彼女には自分の娘が何んだか自分から遠くに離れてしまつたやうに思われてならないのだつた。」

例(7)

「そして自分でも笑いながら、こんな風に笑つたのは実にひさしぶりであるやうな気が

した。」

「やうだ」が「思ふ」とか「気がする」とか、あるいはそれに類似する意識内動作に関連する例を分類すると次表のようになる。

～やうに思ふ(思はれた)	13コ
～やうに考へる	1コ
～やうに信じる	2コ
～やうに感じる	2コ
～やうな気がする	6コ

その他例(8)のような場合がある。

例(8)

「(前略)それまで眠つてゐた女らしい感情を喚び起したのとまったく同じの心理作用が、今度は、その反作用でもあるかのやうに起つたのだ。」

このように「：やうに思ふ」などには違つた形で意識内動作に直接関係している「やうだ」が17例ある。

だから以上のことをもう一度まとめると次

のようになる。

○比喩の「やうだ」の内、心理や意識の象徴となつてゐるもの——7例

○「…やうに思ふ」「…やうな気がする」らの形で意識内動作に関係するもの——24例
○例(8)のような形で意識内動作に関係するもの——17例

意識内動作にいくらか積極的に関与する「やうだ」は合計48あることになる。

(C)例示の「やうだ」

例示が「やうだ」は5例ほどあるがこれは別に注目すべき点はない。

(四)「やうだ」とそこに表われた堀辰雄の創作方法・姿勢

助動詞「やうだ」を使用する側の文章心理はどのようであるか。

「聖家族」は昭和五年に発表された作品であるがそのころ書いた感想風な小品を集めた「詩人も計算する」の中の「僕らの古典主義」という文章に次のような一節がある。

「ここで僕らの古典主義といふものを誤解されないやうに、僕は一つの比喩を語ろう。

一個の風船。それを一本の糸が地上に結びつけてゐる。その間、それはわれわれをあんま

り感動させない。しかし、その糸が切られる。すると風船はひとり、美しく空に上昇する。その時、われわれは深く感動する。

そこに僕らの古典主義の原理がある。一つの作品が現実の糸によつて結びつけられてゐる間は、そんなに美しくない。もっと美しくなるためには、その糸が切られなければならないのだ。」

これは明らかに、虚構による小説の世界とその小説の動機になる現実の世界との關係を語つたものである。現実の世界での体験を一度対象化して、それを小説の世界で組み立てなおして新しい現実を構成しようという。

助動詞「やうだ」はこの堀の虚構のあり方と深い關係があるように思われる。山室静氏は次のような指摘をしている。ラジイゲを知つた堀は「そこで純粹な詩的虚構としての小説を求めた。」(「解釋と鑑賞」三六年三月号)

問題はこの詩的虚構がどのようにしてなされるかということである。そのことは例(2)に上げておいた「菜穂子」の文章に特によくあらわれている。芥川竜之介をモデルにしたと思われるこの「孤独な作家」を彼は芥川を回想することによつて創造しているのである。

助動詞「やうだ」は彼の創作方法が回想であ

ることを示めしている。ラジイゲなら「人生に疲弊したこの作家を」というふうに見えるであろう。「人生に疲弊したようなこの作家を」と言う所に堀の創作心理の特殊性があると思われる。山室氏の「詩的虚構」という場合のこの「詩的」の實現は過ぎ去つた過去の事件を、人間關係を、そこに生じる心理的葛藤を、時間の浄化(昇華)作用が浄化して

れた後に、回想することによつて定着し、そのことによつて實現したのである。このようにな形式で発想される所に「やうだ」が文章の上に現象する理由がある。逆に言えば堀の文章で「やうだ」が多く使用されていることは堀の作品が回想によつて「詩的虚構」を実現しようとしてゐることがわかる。そして堀の側から言えば回想によつてモデルの人物やその心理を対象化して、小説の世界にもちこむ場合に、「やうだ」を多用する文章を書かざるをえなかつたのであるが、読む側に与える「やうだ」の効果は、「やうだ」という語の基本的な性格が不確実な断定(比喩の用法も、例示も派生的な用法であり、不確実な断定の意味を多分に含む)であることによつて、現実との糸を切られた風船の世界(「詩的虚構」の世界)を実感させるのである。堀辰雄の作品の世界が「やうだ」のみによつて支えられてゐるわけではないが、「や

うだ」が、その作品成立に深い関連があること
をもって私の研究発表を終わる。(本学三年)